

# 伊寧事変と新疆の民族運動

中 田 吉 信

## 〔目 次〕

はしがき

史料と研究

事変の原因

事変の経過

東トルキスタン人民共和国の成立

タルバガタイ・アルタイ地区の併合

ウルムチの危機と天山南路の混乱

和平交渉の経過

連合政府の成立とその崩壊

「新盟」の活動

ブルハンの登場と中共による統一

新疆の諸民族と民族運動

註

は し が き

伊寧事変とは、一九四四年秋、新疆省のイリ地方（クルジア）で起ったカザック族、ウイグル族等の少数民族を中心とする叛乱である。少数民族側はたちまちイリ地方全域を占領して、翌四五年一月には「東トルキスタン人民共和国」の成立を宣言し、同年七月、八月にはタルバガタイ、アルタイの両地方も併合し、更に東に進んで、精河、

烏蘇を占領し、マナスに迫り、省都ウルムチをおびやかす勢であった。国民政府は驚いて、十月に張治中を派遣して、イリ側と和平交渉に当らせた。この結果、翌四六年六月にようやく和議が成立し、イリ側は独立を取消して、事件は一応の落着を見た。しかし間もなく、省主席の任命問題や和平条件の実施に伴う問題から、イリ側とウルムチの国民政府側の対立が表面化し、四七年の六月から八月にかけて、イリ側は人員をすべて引揚げ、交渉は決裂した。そしてイリとウルムチの二つの政権の対立のうちに、新疆は四九年十月の北京政府の成立を迎えたのである。

本稿は、この事変の原因と経過を考察し、併せてこの地方の民族運動の性格を考えてみることにする。

## 史料と研究

この事変について最も数多くの著述をしているのは張大軍である。張大軍は民国四十三年（一九五四）に「新疆近四十年変乱紀略」（台北 中央文物供应社）という百三十四頁の図書を出しているが、その第四章「俄帝製造下の伊寧事変」以下、第五章「在俄帝覬覦下新疆得不到和平」第六章「紅禍泛濫亞洲後的新疆」と、三章十七節七十頁にわたって、事変の経過を記している。彼はまた民国五十年（一九六一）に「吳忠信在新疆的治績」（新時代一卷一〇期）・「民国三十三年の伊寧事変」（新時代一卷三期）・「伊寧事変後蘇俄攫取塔城・阿山・烏蘇・精河的経過」（新時代一卷六期）と相次いで発表し、これらはいずれも国防研究院の「边疆論文集」（台北 民国五十三年刊上下二冊）に転載されている。更に「民国以来的新疆」「新疆伊寧事変与偽土耳其斯坦共和国成立及其潰滅」の二篇を「新疆研究」（台北 中国边疆歴史語文学会 民国五十三年刊）に掲載している。これら一連の著作はなかなか

か詳細なものであるが、内容的には重複している点が多い。

張達鈞の「四十年動乱新疆」（香港 亜洲出版社 民国四十五年刊）は最も詳細な新疆現代史であるが、その十二「伊寧事変悲劇」以下、二十二「新疆民族之末路」まで百三十頁以上にわたって、事変の経過を詳しく記している。略図、図版も、不鮮明ではあるが、比較的豊富であり、巻末には重要辞彙の註釈も附されていて便利である。ただ内容的には、多少の出入はあるが、張大軍の記述と重複している点も多い。一六二頁に著者がマナス守備隊に直接参加し、イリ側と対峙していた時の模様を記しているが、張大軍の「新疆近四十年変乱紀略」の七七頁にもほとんど同じ記事が見える。張達鈞も張大軍も現代北京語では Chang Ta-chün であるから、同一人物が台北と香港で筆名を使い分けているのかも知れない。

国民政府側の記録では、以上のほか、広祿の「蘇聯侵略新疆之回顧与前瞻」が「大陸雜誌」二卷八号（民国四十年）に発表され、これは前掲の「辺疆論文集」の第二冊にも収められている。同じ著者の「俄帝侵略新疆之陰謀」が前掲の「新疆研究」に掲載されている。どちらも事変の経過については簡単である。徐伯達の「三十年來俄帝新疆之侵略」（「中国辺政」創刊号 民国五十二年六月）も同様で、事変が起ったのも、イリ側が和平に踏み切ったのも、すべてソ連の差金であるとしている。

中共側から見た記述は意外に少く、今後に期待したい。サイフウディン（賽福鼎）の「五軍（前民族軍）的組成及其革命史」が「新華月報」の第二巻第四期に掲載されている。同じく「新華月報」第一巻第二期に掲載されている林淡秋の「新疆的民族解放闘争——人民政協新疆代表团在記者招待会上報告」は一九四九年十月四日のサイフウ

デインの発言の要約であるが、簡単なものである。どちらも「東トルキスタン人民共和国」の成立については全く沈黙している。この事変の最も重要な指導者であるアクメジャン カシモフ（阿合買提江）の遺稿「我們在民族問題中的一些錯誤」が「新華月報」第一卷第四期に掲載されている。「大公報」上海版の一九四九年一月八日、九日に載せられている林炎の「伊甯人物路綫」とともに、この事変の性格、殊に民族問題を探る上に貴重な資料となる。

ソ連の研究を求めると、ミンジロフ (M.N. Mingulov) の「中国革命の一環としての新疆の民族解放運動 一四四一—四九」という論文が一九六二年アルマアタで発行された「カザックスタン及び東トルキスタンの歴史の諸問題」(Voprosy istorii Kazakhstana i vostochnogo Turkeстана) に載せられたとのことである。その英文要約が「The uprising in North-west Sinkiang, 1944-49」として、ロンドンで刊行された Central Asian Review の第十一巻第二号（一九六三年）に掲載されている。この Central Asian Review には新疆に関するソ連の研究がいくつしか抄訳、紹介されているが、伊寧事変についてあげられているのは、このほかには、K.F. Kotov の“Sinkiang, 1928-1959” (Vol.8, No.4) のみである。

欧米の研究では、オウエン・ラティモア (Owen Latimore) とその研究グループの手に成る“Pivot of Asia” (Boston, Little, Brown and Co., 1950) (邦訳書——中国研究所訳「アジアの焦点」弘文堂 昭和二十六年刊) をあげなくてはならぬ。邦訳書では一七頁から一三七頁までこの事変とそれに続く新疆の情勢を記している。

ワイティンズ (A.S. Whiting) の元新疆省主席盛世才 (Sheng Shih-ts'ai) の共著“Sinkiang: pawn or pivot” (Michigan State University Press, c1958) は二部に分れ、第一部はワイティンズの記述、第二部は盛世才の回想

録であるが、その第一部の最後の章「Postscript: 1944-1949」(p.98-123)は参考になる。事変の経過は詳しくはないが、背後の中・ソの外交関係が解明されている。

バーネット (A. D. Barnett) の「China on the eve of communist takeover」(New York, F. A. Praeger, c1963) の第十七章 Chinese Turkistan(p.236-281) は一九四八年九月における著者のウルムチからの報告である。事変解決のためのウルムチ・イリの和平交渉、その成立、更に一九四七年の決裂とそれ以後の文書による交渉過程などが詳しく、他書に見られない史料もある。

モゼレー (George Moseley) の「A Sino-Soviet cultural frontier; the Ili Kazakh Autonomous chou」(East Asian Research Center, Harvard University, 1966) は中共治下のイリ カザック自治州の現状についての新しい研究であるが、その第二章「カザックと東トルキスタン共和国」はこの事変をとりあげている。

ルンペン (N. L. D. McLean) の「Sinkiang today」(International Affairs, Vol. 24, No. 3, July, 1948, p.377-386)、「ダリン (D. J. Dalin) の「Soviet Russia and the Far East」(Yale University Press, c1948) (邦訳書——直井武雄訳「ソ連と極東」法政大学出版社 昭和二十五年刊)の第十七章の「新疆」の項 (邦訳書 二三五—二四五頁)もこの事変にふれて多少参考になる。ベロン (Max Beloff) の「Soviet policy in the Far East 1944-1951」(London, Oxford University Press, 1953) (邦訳書——石川忠雄・小谷秀二郎訳「ソヴェエトのアジア政策」日本外政学会 昭和三十二年刊)の新疆の項 (邦訳書 一五五—一六二頁)もふれているが、目新しい見解は見当らない。デヴィッドソン (Basil Davidson) の「Turkestan alive」(London, Jo-

nahan Cape, 1957) (邦訳書——小林雄一訳「生きていく国」 紀伊国屋書店 一九五九年) は異色あるルポルタージュであるが、その「赤いダットン地方」(邦訳書 一〇五—一二五頁)も参考になる。

日本の研究では、波多野乾一「新疆問題の歴史的展望」(『ソ連研究』一九五三年六月)、矢野光二「新疆事情」(産業政策研究所 昭和四十年)、笠原正明「新疆解放前後」(『神戸外大論叢』第十一巻第二号)、坂本是忠「新疆をめぐる中ソ関係」(英修道・入江啓四郎監修「中国をめぐる国境紛争」 巖南堂書店 昭和四十二年 一五四—一七四頁)等がこの事変をとりあげているが、いずれも簡単である。また「毎日情報」六巻十号(昭和二十六年)に「脱出回教徒が語る赤い秘境新疆」というアタバイの手記が掲載されており、この事変について記しているが、大して参考にならない。

### 事変の原因

この中国の辺疆の省の歴史の中で、蔣介石の反人民集団による統治を記した頁よりも暗いものはない。彼の統治はいかなる面でも、破壊を与えるか、腐敗をもたらしした。農業では耕地面積は百三十万ヘクタールから僅かに百万ヘクタールに減じた。沃野となり得る広大な地域は、灌漑組織がないためか、あるいは荒廃してしまつたために、実際は不毛の地になっていた。村村に人影がなくなり、住民達は乞食となり、彼等の耕地は荒野となった。畜産においては、家畜の頭数は千七百万頭から千二百万頭に減じた(Central Asian Review 11-2 p. 181)。

ミングロフは冒頭にこのように記し、蔣介石の集團即ち国民党の新疆統治政策を強く非難している。ついで彼は、労働大衆に対する国民党官僚、封建的地主、商人および金貸し達の搾取、地方行政の腐敗と賄賂の横行、租税の不公平、独占資本の買占め等の事実にふれたあと、国民党の少数民族政策を取上げ、

省全体を掌握するのに都合がよいように、党は少数民族の間に故意に不和の種を蒔き、彼等の間の商業的、文化的連繫の發展を妨害した。これを実行することにおいては、満清政府や北洋軍閥の政策と技量をそのままに温存していたのであった。少数民族は政府のポストから除外され、学校教育は拒絶され、医療も与えられなかった。(中略)しかし彼等はその仕打ちに意気地なく服従してはいなかった。彼等は、十月革命によって解放された国境地方のソビエト中央アジア諸共和国の民族文化経済の開花を見て、その実例によって彼等自身の自由の戦を鼓舞された(Central Asian Review 11-2 p.182)

と、国民党の少数民族に対する分割統治と蔑視政策、少数民族のソ連中央アジア諸共和国への憧憬を叛乱の原因にあげている。

ミングロフは更に「中国共産党による初期の刺激」と題し、一九三三年における中国共産党の党員の新疆への派遣、その党員達の新疆における活躍、一九四三年の中国国民党新疆省支部の成立と外国領事館の開設、その指導による共産党員陳潭秋、毛沢民、林基路の逮捕と死刑執行、ソ連との通商の断絶、それに伴う新疆の経済的破綻を記したのち、

政府側のこの破廉恥なやり方は人民の怒りをかきたてたので、主席盛世才の召還が賢明な策と判断された。(し

かし）ほかには何も改善されなかった。民族差別は相変わらず宣言され、中国語がなお司法、行政上の用語であった。マルクス・レーニン主義は、革命が歴史過程の自然の進歩によって起ることを教えている。それはレーニンが記したように、「数百万数千万の人人が、もはやこのように暮してゆくことは不可能である、という結論に達した時に」起る。新疆の物語のなかでその時が間近に迫っていた（Central Asian Review 11-2 p. 183）と、叛乱の前夜の場面を結んでいる。

以上のように、ミングロフは国民党政府の腐敗、失政、搾取を原因の第一にあげているが、この点ではサイフウディンも同じで、

国民党反動派の暴虐、圧迫、罪状が、中国においても、新疆においても、最後の限度に達した時に、新疆人民は一九四四年イリにおいて民族圧迫に反対する武装闘争を爆発させた（新華月報 二―四 七六五頁）と記している。

これに対し張大軍は、非を国民党ではなく、一九三三年から四四年まで新疆の内政外交を壟断していた主席盛世才の恐怖政治に帰している。即ち盛世才は民国二十六年（一九三七）に富農、軍政の要職者、各民族の知識分子約三百人を逮捕し、二十九年（一九四〇）にも社会知名の士を多数旧惠遠城内に収容したり、屠殺したりしたが、これが伊寧事変の内原因の一となったとしている（新疆近四十年変乱紀略 六四―六五頁）。そして盛世才を継承した国民党の呉忠信の業績を称え、呉の民平政策（民族平等政策）が民族問題の解決をはかり、信教の自由を擁護し、人權を保障し、民政の安定をはかったとしている（辺疆論文集 第一冊 三四六―三五二頁）。もっとも、張大



軍も一方では、盛世才召還後、伊寧の区警察局長代理行政專員兼保安司令に任ぜられた高煒と、伊寧に派遣された警務処副処長劉秉徳の二人が、酒色に耽つてイリ地方の情勢が緊迫していたことに気づかなかつたことを指摘し、暗に人材の不足による失政も認めていないわけではないが、失政の責任を盛世才個人に集中させている点はミングロフと大きく相違している。

ミングロフの論文を紹介した *Central Asian Review* の編者は

ミングロフがすべてを国民党政府のせいにするのは誤りである。こういう事態を作りあげたのは国民党が新疆に進出する以前のものである。新疆が国民党と切離されている時代に、こういった恐ろしい事態が作り上げられたのである。毛沢民を殺したのも国民党の指図によるものではない (*Central Asian Review* II-2 p.194) と、論じているが、この点は張大軍の意見と似ているものといえよう。

責任は盛世才にあるのであろうか、それとも国民党が負うべきものであるのだろうか。盛世才の恐怖政治が新疆に危機をもたらし、これが事変の原因の一となったことは認められるが、果して国民党は罪なしと言えるであろうか。新疆の近年の歴史を振り返ると、主席金樹仁の追放後、馬仲英を敗って盛世才が省政の実権を握ったのが一九三三年であった。盛ははじめは、民族の平等、信教の自由、農村の救済、財政の整理、吏治の刷新、教育の拡充、自治の推行、司法の改良の八項を宣言し、更に反帝、親ソ、平民、清廉、和平、建設の六大政策を掲げて、進歩的政策を実行した。この間、約九年。ところが独ソ開戦以来、ソ連からの援助が期待できなくなり、逆にアメリカの参戦によって力を得た重慶の国民政府からの圧力が強くなると、四二年頃から親ソ政策を捨て、重慶政府に接近しは

じめた。この頃から盛世才の独裁体制は崩れ、四二年末には蔣介石が「西北開発計画」を発表した。四三年になると、国民政府は新疆の外交、教育等を盛の手から接收しはじめた。ウルムチに国民党の新疆省党部が成立し、中央軍の陸軍、空軍が新疆に駐屯しはじめた。民国革命以来、はじめてのことである。盛は新疆の中央化を快く思わず、ソ連の勝利が確実視されると、再び転向を試みた。四四年八月十一日、共産政権成立陰謀の件で、重慶派の役人の逮捕をはじめ、権力の奪還を企てた。しかし、既に遅く、同月二十九日、盛は農林部長の閑職に転ぜられ、九月十一日に重慶に向って新疆を立去ったのである。このように、新疆は伊寧事変の起る直前まで盛世才の統治下にあつたのであるが、国民政府の力は既に一九四三年頃から新疆に滲透しており、この事変に対する政治責任を回避することはできないと思う。むしろ新疆の中央化に伴う漢人の進出が土着の少数民族の感情を強く刺激したと見てよいだろう。ワイティングの記述（前掲書 九九頁）によると、蔣介石の「西北開発計画」のなかに、新疆の行政、教育、技術面を支えるため、一万人の官吏とその家族を新疆に派遣する膨大な予算が計上されていた。このような補助金つきの漢人移民は新疆の中央支配を強めようという試みであろう。これが土着のウイグル族やカザック族にとって快いものとは思われない。また政治、文化の面で、土着民官吏に代って漢人官吏が起用され、通貨の交換レートは中国本土からの商人に有利なように仕組まれた。しかもこういう漢人商人は新疆の物産を中央に送りこんで莫大な利益を得た。軍隊や文官の大量の進出は土着民に重税を課す結果となった。こういう中央化政策が土着民の反感を刺激したのではあるまいか。また国民党の少数民族政策は、ウイグル族やカザック族を「民族」とは認めず、中華民族内の一つの「宗族」としか認めなかった。これは「大漢族主義」として非難されるところである。後

述するように、この事変は当初において「反漢」的色彩が強かった。これは新疆の省政に滲透していた国民政府によって推し進められていた所謂「シナ化」に対する土着少数民族の反発と見てよいのではなからうか。

張大軍は、盛世才の恐怖政治を原因のみに数えてはいるが、「俄帝製造下の伊寧事変」と題しているごとく、原因の第一をソ連の策動においている。彼によれば、叛乱分子を送りこんだのもソ連、武器弾薬を供給したのもソ連であり、またソ連兵が実際に戦闘に参加したという。このように事変の原因をソ連の策動とするのは、広祿、徐伯達等台湾側の一致した見解であり、我が波多野乾一、矢野光二両氏の見解も同様である。ダーリン、ペロフの見方もこれに近い。蔣介石もその著「中国のなかのソ連」(毎日新聞社外信部訳 毎日新聞社 昭和三十二年刊 七四頁)でこの点を強調している。これに対し、サイフウディンの見解は全くこの点にふれておらず、ラティモアも沈黙を守っている。

この事変にソ連がどの程度関係していたのであろうか。ラティモアを除く欧米の識者の見解はいずれも肯定的である。ワイティング(前掲書 一〇五頁)は、叛乱軍とソビエトの戦略の間の関係は確かな証拠を欠いているが、ソ連のイリ側に対する物質的、精神的援助があった、とする。イリ側の持っていたソ連製の武器は、その大部分がかつて盛世才がソ連から購入していたものをイリ側が奪取したものであろうが、ソ連領内のカザック族等がイリ側に物質的援助をしたであろう。一九四五年九月、イリ側が烏蘇の戦いで大勝利を収めた直後に、和平に関するソ連の提案を受入れたのは、叛乱の当初からソ連の援助があったことを裏書きするものであろう。こういったワイティングの見解に対し、バーネット(前掲書 二六八―二六九頁)は、イリ側の指導者がロシアで教育された人物か、

親ソ的人物であることを強調している。指導者のアクメジャン カシモフやラヒムジャンはロシア共産党の黨員であるという報道もあるという。モズレーも

ソ連が直接に叛乱を煽動したわけではないだろうが、ソ連は間もなく三地区(イリ・タルバガタイ・アルタイ)の革命を支配し、伊寧に東トルキスタン共和国を作り上げた(前掲書 一二頁)

と記し、背後にあるソ連の力を重視している。モズレーの研究では、一九四四年から四九年までの間にイリ地方に扶植されたソ連の影響は非常に大きく、中共は四九年以降、これを排除するのに多大の労力を要したという。いずれにせよ、ソ連の精神的、物質的援助がイリ側の立場を強化したことは認められるが、叛乱をソ連の煽動によるものとするのはどうか。

ただここでもう一つ考えなければならないのは、経済面における新疆とソ連の関係である。一九四二年、盛世才が親ソ政策を捨ててから、ソ連は新疆に駐屯していた軍隊と技術者を引揚げた。と同時に対ソ貿易も中断されたために、新疆の物価は騰貴し、インフレが進み、経済が破綻した。これが叛乱の大きな原因となったことは認めねばならない。地理的に見ても、新疆と中国本土とは僅かに甘肅の廻廊地帯によって繋がっているのみで、その道もゴビ沙漠で遮断され、通過には大きな困難を伴う。新疆は、東北はモンゴル人民共和国とアルタイ山によって境を分かち、南は崑崙山脈によってチベットと隔絶されている。西はパミール高原と天山山脈によってソ連領中央アジアと遮断されているが、これを越しての交通は昔から盛んで、国境の彼方には同じトルコ系の民族が住んでいる。特に天山北路のイリ地方やタルバガタイ地方は、西に向って広く口が拡がっており、ソ連領との文化的、経済的關係が

深い。地理的、民族的面でも、新疆は中国本土よりソ連領中央アジアとの結びつきが強く、経済交流の面でも、中国本土とよりもソ連の方が盛んであり、便利でもある。従ってソ連との関係、特に経済的關係を絶たれることは、新疆にとって大きな打撃になる。楊增新がロシア革命の直後に「イリ局部通商条約」を結び、ソ連との貿易を保持したのもこの点を考慮していたからである。盛世才が親ソ政策を捨てたことが新疆に経済的破綻をもたらし、新疆の情勢を險悪化したということが出来よう。

## 事変の経過

この事変は一九四四年九月に勃発したのであるが、既にその年の春から事変の前触れともいえるべき不安な情勢がイリ地方に漲っていた。以下、張大軍の筆を中心にその概要を記そう。

民国三十三年即ち一九四四年の春、イリ地方では到る処に、「ウイグル族、カザック族が叛乱を起そうとしている」「タルバガタイが陥落した」「ソ連が新疆を攻めようとしている」という謠言が流布され、物価は上り、人心の不安は増した。ソ連領のアルマアタに成立した「突厥人民解放委員会」の伝單は到る処にばらまかれ、ソ連は飛行機を越境させ、国境に兵力を増強した。また暴民に武器弾薬を供給し、アリハンテュレと密約を結んで革命党を組織させ、三十余人がこれに参加した。八月末、独立營の兵士数名のソ連領への逃亡計画が発覚し、ソ連のスパイ五名が軍隊に潜入して叛乱を煽るといふ事件が起った。またこの年のはじめから失踪して行方がわからなかつた鞏哈県土産公司副經理のタタール族法合提が、九月にソ連領から武器弾薬を携えて帰国し、ホルゴス附近で中

国側の保安隊に発見されるといふ事件が起つた。九月十一日には鞏哈の烏拉斯台のカザック族毛特夫の家で、「漢族政府の圧迫をはねのけ、革命を起そう」といふ趣旨の法合提等の伝單が発見された。また当時の新疆政府は馬を政府に献納する運動を提唱していたが、これに対する反対運動を民衆に向つて宣伝した。<sup>(1)</sup>ところが当時、イリ地方の軍隊は全く混乱し、指揮に當る首脳部も欠く状態であつた。九月二日、主席盛世才は予備第七師副師長杜德孚を召見し、イリ地方の軍隊の統一指揮に當らせた、杜德孚は単身イリに飛んだが、イリの軍隊が全く役に立たないことを知り、急遽増兵を要求した。しかしウルムチには派遣すべき軍隊もなかつた。

九月二十一日、叛乱は開始された。叛乱軍はまず二十余騎で鞏哈と馬札間の電線を切断し、橋を毀し、馬札附近に進入した。ソ連は叛乱軍に武器彈藥を供給した。十月八日、叛乱軍は千余名で鞏哈街を攻撃した。守備隊は全く訓練のない新兵であつたので忽ち進入を許し、土産公司辦事處、財政局等が襲撃された。叛乱軍は監獄に押入つて、カザック族の囚人をすべて解放し、他民族の囚人をみな殺しにした。更に警察局を陥れ、県府科長閻徳本、會計馮元泰は逃亡したが、伊犁区警察副局長趙中明、警察局長馮維俊、副團長喜海山、衛生院巴院長等は土産公司辦事處の庭で殺害された。

鞏哈の陥落はイリ地方の形勢を一変させた。杜德孚はウルムチに飛び、朱紹良に会い、イリの情況と鎮定計画を報告した。当時、前主席盛世才は既に重慶に召還され、後任の呉忠信が赴任するまで、朱紹良が代行していたからである。杜德孚は漢族を武装させて自衛させる手段を考えたが、実現には至らなかつた。伊寧市には「東トルキスタン共和国」の成立を鼓吹する伝單がばらまかれ、あらゆる暴行と暴言が漢人に集中した。十月十二日、ウルムチ

は預七師十九団長彭俊業に救援を命じ、更に十八日には曹參謀長を派して、鞏哈の収復に当らせた。しかしこのために、伊寧の防備が空虚になり、十一月七日から八日にかけて伊寧市が直接攻撃を受けるに至った。カザック共和国の服装をした兵士がこの攻撃に参加し、ソ連軍三百が菓子溝を占拠して、綏定が急を告げるに至った。伊寧攻撃軍の統一指揮は白系ロシア人ポリノフ（波里諾夫）であった。十一月十三日、伊寧の土産公司、区警察局が陥り、局長高煒は逃亡したが、カザック族の手で殺され、劉秉徳も十日に専員公署が陥ちた時に殺された。十二月十三日、叛乱軍は政府軍の拠点空教隊と鬼王廟に向って総攻撃を開始した。ソ連軍もこれに加わった。激烈な戦闘が繰返されたが、叛乱軍の烈しい攻撃に耐えかね、翌四五年一月三十一日、遂に政府軍の総指揮官杜徳孚は軍民四千を率いて東の方、精河に向って脱出を試みた。しかし叛乱軍の追撃を受けて忽ち包囲され、杜徳孚は自殺した。残された軍民は伊寧市に追い返されたが、ウイグル族やカザック族の殺戮に遭い、僅かに八百余名が助かったという。これより先、綏定も四四年十一月下旬に陥落し、一万余の漢民はみな殺しにされた。寧西、霍城も降り、鞏昌、新源、特克斯、博楽、温泉も陥落し、イリ地方はすべて叛乱軍の手に帰した。

以上がイリ地方の叛乱の経過についての張大軍の記述である。ソ連軍が直接戦闘に参加したという記載がしばしば出てくるが、実際に軍の命令でソ連軍が出動したのか、あるいはカザック共和国の人民が自発的に義勇兵の形で参加したのか、この点も明かにできない。

## 東トルキスタン人民共和国の成立

烈しい政府軍との戦の最中において、イリ側は着着と独立の準備を進めていた。一九四四年十一月十日、元のイリ行政専員公室で「東トルキスタン人民委員会」が成立した。張達鈞によると、その前身は「新疆突厥民族解放委員会」であるという。委員会の中に、内政、財政、教育、軍政、実業、監察、宗教、交通の各部を設け、アリ、ハ、ン、テュレ（艾力汗条熱）、ハキム、ベク、ホジャ（艾青木祥和加）、ポリノフ（波里諾夫）、ガニ（艾尼）、アクメジャン、カシモフ（阿合買提江）、ラヒムジャン（頼希木江）等を委員に選出した。翌四五年一月、伊寧で代表大會を開き、政府内部組織、施政綱領及宣言を通過させ、主席、副主席、各部部长を選出し、正式に「東トルキスタン人民共和国」<sup>(2)</sup>の成立を宣佈した。その政綱九条は、張大軍、張達鈞の記述によると、次のようである。

- 一、漢人の各種の虐政を根除する。
- 二、国体を定めて民主政体となす。
- 三、軍隊は人民に属す。
- 四、各族は一律平等である。
- 五、宗教を尊重する。
- 六、各級官吏は必ず人民の選挙による。
- 七、親ソ政策を実施する。



八、教育を發展させる。

九、ウイグル文を国文となす。

ところが、ミングロフの記述によると、一九四九年一月五日に發布した綱領は次の通りである。

一、国民党の絶滅。

二、域内各民族の平等にもとづく民主政体の確立。

三、有能な多民族人民軍の設立。

四、銀行、電話、電報、郵便、森林、鉱山の国有化。

五、工業、農業、牧畜、私企業の振興。

六、宗教の自由。

七、教育と公衆衛生。

八、民主諸国、特にソ連との友好の確立。

張大軍や張達鈞が「漢人の各種の虐政を根除する」と記しているところを、ミングロフは「国民党の絶滅」として、「漢人の虐政」を「国民党」に置き代えている。「反漢人」なのか、「反国民党」なのか。これによって「東トルキスタン人民共和国」の性格、更に伊寧事変の本質が大分変わったものになる。私はこの事変は当初において「反漢人」的色彩が強かったのではないかと思う。もとより少数民族側の憎悪の焦点はウルムチ政府と国民党であった。しかしそれを取巻く漢人社会、特にその官僚組織と、それに密着して土着民を収奪していた商業組織に烈し

い憤りの眼が向けられていたのではないだろうか。多数の漢人が虐殺されたのもこのためであろう。アクメジャンカシモフは前掲の遺稿<sup>3)</sup>のなかで次のように記している。

我々の民族解放運動の開始時期と、我々の民族解放運動が武装起義の段階に達した時に、我々が民族問題において誤りがなかったとはいうことができない。伊寧、綏定その他の国民党反動政權を倒し、国民党の武装力を殲滅した時に、漢族人民全体を国民党反動派と一体であると認めてしまい、漢族人民全体と、国民党の少数貪官汚吏、人民を搶掠する国民党軍隊、人民を圧迫する国民党警察とを、はっきり分けることができず、漢族人民全体をすべて敵人であるという誤った認識を持った。その結果、我々は友人と敵人とを分別することがなく、漢族をすべて一様に見て、誤って我々の友人を打った。そして国民党官吏や、我々民族に害を与える民族敗類を擁護してしまった。その結果、我々の民族運動の同情者であり、国民党反動統治の敵人である我々の友人漢族人民を、彼等の敵人のふところに投げ入れてしまったのである（新華月報 一一四 八八三頁）。

このように、この事変は当初において「反漢人」的色彩が強く、その意味では、清朝時代の叛乱と似たようなすべり出しであった。

「東トルキスタン人民共和国」の主席には、アリハンテュレが選出された。張達鈞によれば、彼はウズベク族で元アンジアンの大アホン、イスラム経典学者で、当時六十余歳であったという（前掲書 一七六頁）。ミンゴロフは彼をウィグル族としているが、デヴィッドソンもウズベク族としている。東トルキスタン人民共和国の主席として花花しく登場した彼も、間もなくその名が消えてしまう。デヴィッドソンが現地でも聞いたところでは、一九四

七年に死んだとも、病氣治療のためウズベク共和国へ行ったともいう(前掲邦訳書 一一〇頁)。しかし張達鈞は「遭整肅」と記し、バーネットも一九四八年当時はソ連に監禁中と記している(前掲書 二六九頁)。副主席には白系ロシア人のポリノフとウイグル族のハキム ベク ホジャが選出された。ポリノフはかつて馬仲英との戦に勇名を轟かせ、盛世才時代には投獄されたこともある軍人。ハキム ベク ホジャは、張達鈞によると、当時七十余歳、イリの富商であり、清代には世襲のベクであったという。ミングロフは大地主であると記している。こういう所謂民族ブルジョアジーが政権の表面にたったので、ミングロフはこの政権の性格として、族長的封建的性格、家内奴隸的諸要素が残存する村落における後進的生産関係、イスラム教僧職者の強い影響力の三つをあげている(Central Asian Review 11-2 p. 185)。ヤックリーンも

はじめは彼等はイスラム的生活方式を鼓舞し、異端者漢人に対する「聖戦」を声明した。しかし後に、彼等はプロイスラムの宣伝をやめ、中央アジアトルコ民族の「民族解放運動」の発展を促進しようと試みた(Inter-national Affairs 24-3 p. 383)

と、当初におけるイスラム的性格を認めている。しかし張達鈞は、アリ ハン テュレ、ハキム ベク ホジャ等の土着派は傀儡に過ぎず、実権は既に三十歳前後のソ連帰りの連中、即ちアクメジャン カシモフ、ラヒムジャン、サイフウディン等に握られていたと記している(前掲書 一七八頁)。

アクメジャン カシモフは、張達鈞によれば、ウイグル族で、事変当時三十五歳、ウズベク族であるともいう。ソ連に留学し、漢語もでき、かつて新疆日報伊寧分社社員であった。事変の半年前から失踪し、ソ連に赴いていた

という(前掲書 二八六頁)。ダーリンによると、彼はソ連領ウズベクスタンから来たもので、カシモフはロシア名、八歳の頃からソ連と新疆の間を往復し、一九三五年頃新疆を去ってソ連に遊学、教師としてイリに帰ったが、三八年逮捕され、その後釈放された。四四年しばらくロシアに旅行し、叛乱運動の政治的指導者として帰って来たが、ソ連の市民権を持っていたという(前掲邦訳書 下巻 二四一頁)。バーネットによると、彼は一九四八年当時三十三歳、伊寧の大王の息であるという(前掲書 二六八頁)。またラヒムジャンについて、バーネットは後に新疆省主席になったマースド サブリの甥であり、養子でもあるとしているが、張達鈞によると、マースドの女婿であるという(前掲書 三〇〇頁)。張達鈞はアリ ハン テュレ、ハキム ベク ホジャ等を土着派、アクメジヤン カシモフ、ラヒムジャン等を国際派と呼んでいる。

#### タルバガタイ・アルタイ地区の併合

張大軍の「新疆四十年変乱紀略」の七十二頁から七十七頁の記述によると、ウルムチ政府は兵を精河、烏蘇の線に退いて、イリ側の東進を食い止めようとした。しかし、イリ側のポリノフ、レスキン等は、一部の兵でこれを牽制しながら、大部分の兵をアルタイ地方とタルバガタイ地方に向け、これを占領しようとした。

タルバガタイ地方では、これより先、一九四四年八月に、モンゴル、カザック両民族の「各民族解放復興社」の陰謀が発覚した。この組織は漢人および政府の横暴に対する反対を呼号していたという。また額敏県のモンゴル、カザックの牧民も騒動を起し、和豊県のモンゴル族も霍布克を包囲したほどであった。一九四五年七月十八日、ポ

リノフはまず烏蘇からタルバガタイの中心塔城に通ずる公路を切断し、二十一日に廟児溝、三台を襲ってこれを陥れた。ついで額敏を攻め、二十九日に占領、その県長焦乃成を塔城に派遣して降伏を勧めた。軍隊はただちに武器を供出すること、各機関の長は自動車で内地へ運び、兵士は解散させること、当地に残留を希望する者にはそれを許可することの三条件をつきつけ、二十四時間内の回答を求めた。塔城の守備隊は七月三十一日、李振声、徐克義に率いられて城を脱出、大部分はソ連領へ逃れ武装を解除された。一部の七十余人は南へ下ってマナス方面に逃れたが、途中で病に倒れ、僅か二十余人がマナスに到達できたに過ぎなかった。こうして塔城も簡単に陥り、霍布克城も八月九日に包囲されて、二十一日に陥落、和豊、裕民両県も陥り、タルバガタイ地方は全くイリ側の占領するところとなった。

アルタイ地区の中心である承化（シャラスメ）が始めてイリ側の攻撃を受けたのは一九四五年五月二十日、ついで六月から七月にかけて、カザック族のウスマン・バートルの攻撃を受けた。ウスマンは既に盛世才時代の一九四〇年から四二年にかけて、この方面で外蒙軍の援助を受けて叛乱を起した人物である。彼はイリ側と結び承化を攻撃した。彼は後になってイリ側と袂を分ち、国民政府と結び、中共軍に最後まで抵抗して、殺されている。七月二十日からイリ側の将、カザック族の達里力汗の総攻撃が始まった。ウスマンも加わり、ポリノフも駆けつけ、承化を包囲した。承化の守備隊は一月以上も籠城抵抗したが、糧食弾薬も尽き、九月六日、濃霧を利用して脱出を試みた。しかし外蒙に入ろうとして入国を拒まれ、イリ側の追撃を受けて、ほとんどが殲滅された。

イリ側はこれに力を得て、烏蘇を攻撃、九月四日に城内に進入し、激烈な市街戦の後、八日にこれを占領した。

このため、その西にある精河は孤立無援となり、守將郭岐は守備兵を率いてウルムチへの脱出を企てた。しかし、イリ側の追撃を受けて道を失い、九月十八日に捕えられた。十二日には安集海、十三日には三道河子も占領され、イリ側はウルムチに迫った。政府軍はマナス河の東岸に退き、ここを死守しようとした。張大軍、張達鈞が参戦したのもこの時である。

このようにして、イリ、タルバガタイ、アルタイの三地区は完全にイリ側の占領するところとなり、三地区合せて人口五十万の「東トルキスタン人民共和国」が天山北路の地に誕生したのである。

#### ウルムチの危機と天山南路の混乱

政府軍は烏蘇、精河を失つて後は、マナス河の東に退いて、イリ側の攻撃を阻もうとした。しかし戦火は遠く天山東路の地に波及し、側面からもウルムチをおびやかすに至った。この天山東路の地を攻撃したのはアルタイ地区と外蒙の国境近くの北塔山に陣していたカザック族のウスマン・バートルであった。一九四五年九月、ウスマンは兵を三方面に分ち、一気に南下した。一はゴビ沙漠中の小径によって直ちに阜康県へ、一はアルタイ・奇台間の公路上に沿って奇台と木壘河へ、一はゴビ沙漠を横断して孚遠県へと向った。この攻撃にこの地方のカザック族も呼応したため、天山東路の地は大混乱に陥り、イリ側の兵は托克遜、ウルムチ附近にもしばしば姿を現すほどであった。この結果、ウルムチは東西からおびやかされることになり、物価は騰貴し、人心は動揺した。省都のハミへの移転論も出る程であった。中央政府は郭寄嶠を副長官として送りこみ、青海騎五軍馬呈祥を入新させ、漸く東路の地に

小康を保たせることができた。

しかし、天山南路の地にもイリ側は滲透して来た。既に一九四四年十二月にイリ側は特克斯から和靖県の巴彥布魯克に進入し、この地方のモンゴル人を連去ったことがあったが、四五年の七月から九月にかけて、焉耆の北部地方をおびやかした。また冰達坂を越えてアクス、庫車等を攻撃し、八月十五日と九月二日の二回にわたり、拜城が一時陥った。九月には温宿が陥落し、アクスも一時包囲されて危急を告げられた。

戦火は更に遠くパミール高原上の一小都市蒲犁にも波及し、四五年八月二十二日に陥落、ここを根拠に莎車、葉城を窺うようになった。九月にはヤンギシヤールをめぐる大決戦があり、四六年一月には葉城、沢普も陥り、更に和闐地区の皮山も一時イリ側の手に落ちた。

ただこの蒲犁即ちサラコル地方の叛乱についてバーネットが西南新疆在住の外国人から聞いた話では、「叛乱」ではなくして、「侵入」であるという（前掲書 二六六頁）。戦は国境を越えてソヴィエト諸共和国から侵入した軍隊によってなされた。侵入軍は現地のタジック族やキルギス族を敵に廻し、その穀物、家畜に損害を与えた。一九四八年当時では既に中国人統治の下で、この地方は安定し、平和になった。この地方の住民は親中国的である。その外国人はこうバーネットに語ったという。

### 和平交渉の経過

一九四五年九月、駐華ソ連大使アポロン ペトロフは国民政府の外交部に伊寧事変の平和解決の斡旋を申し入れ

てきた。イリ側の代表が駐伊寧ソ連領事館に調停を依頼してきたため<sup>(4)</sup>という。この時にイリ側は、「自分達にはもともとから中国を脱離する意志がなく、その意図はイスラム教徒が新疆において多数を占めるイリ、タルバガタイ、アルタイ、カシュガルの各区において自治を獲得するのが目的である」と、表明したという。戦況がイリ側に有利に展開している時に、彼等の方から和平を申し入れてきたのは何故だろうか。「東トルキスタン人民共和国」の独立宣言をして一年も経たないのに、中国を脱離する意志を持たないと、態度を豹変したのは何故だろうか。張大軍はイリ側の和平の申しこみもクレムリンの差金でありとし、その原因を次のように説明している。

主要な原因の一つは、中ソ友好条約が署名されたばかりであり、東北問題が中ソの紛争を惹起する可能性があるため、西方においては一地方事件のように偽装し、中国内政に干渉しにくいことを表明するに越したことはない。更に新疆問題を解決せんがためには、中ソ問題の全般的解決を待たねばならず、中ソ問題が解決しなければ、伊寧事変を拡大する必要はない。他の一つの原因は、イリの土着民族の革命はただ暫定的に利用するだけで、彼等が「パシヤ」の迷夢に熱中するのを利用するものである。もし中国全土が赤化しなければ、将来必ずその陰謀は暴露されるものであり、暫時休戦して政治的に吸収を謀るに越したことはない。更に烏蘇・精河一帯における戦争の損失は非常に甚大で、ウルムチを攻略するのは土着民族の手に負えることなく、どうしてもソ連軍が出勤しなければならぬ。このようなことをすれば、世界の耳目をごまかすことはできず、中国内政に関与した罪名を免れるためには、時間の代りに空間をとり、再挙の機会を待つに越したことはない

(新疆近四十年変乱紀略 一〇〇頁)。



国民政府はソ連大使の斡旋をただちに受入れ、張治中を派してイリ側との交渉に当らせた。十月十二日、イリ側からアクメジャン、カシモフ、ラヒムジャン、アブド、ハイル、テュレの三人がマナス河を渡り、ウルムチに姿を現した。十七日から交渉が開始されたが、その交渉は難航を極めた。国民政府側にとっての難題は、イリ側の要求する「高度自治」「民族軍の成立と軍隊の民族形式の保持」「新疆省政府への参与権」の三点であった。幾度かの折衝と、張治中の懸命の努力によって、翌一九四六年一月二日、次の十一条の協定が成立した。

(一) 政府は新疆人民に行政官吏選出の選挙権を与える。事変解決後三ヶ月以内に各県人民により県参議員を選出し、県参議會を成立させ、参議會によって県長を選挙する。副県長および県政府の科長以上は県長が任用する。各県の参議會が成立した後、法律により省参議員を選挙し、省参議會を成立させる。これは人民の総意を代表し、省政府を監督し協助する。

(二) 政府は宗教についての偏見を取締り、信仰宗教の完全な自由を認める。

(三) 国家行政機関、司法機関の文書に民族文字の単独使用を認める。

(四) 小学校、中学校では民族文字による教育を実施する。ただ中学校では国文(中国文)を必須課目とする。大学では国文と回文(ウィグル文)を併用する。

(五) 政府は民族の文化、芸術の自由な発展を認める。

(六) 出版、集会、言論の自由を認める。

(七) 政府は人民の実際の生産力と力量に照し、税率を規定する。

(八) 政府は商民の国内外貿易の自由を認める。しかし対外貿易の商民は中央政府と外国との通商条約の規定に

従うべきである。

(ウ) 新疆省政府委員は二十五名とし、そのうち十名は中央が直接派遣し、十五名は各区の人民代表が推薦し、中央がこれを任命する。中央が派遣する十名の委員は、主席、秘書長、民政庁長、財政庁長、社会処長、教育庁副庁長、建設庁副庁長、衛生処副処長および専任委員二名とする。各区人民代表が推薦し、中央が任命する十五名の委員は、副主席二名、副秘書長二名、教育庁長、建設庁長、衛生処長、民政庁副庁長、財政庁副庁長、社会処副処長および専任委員五名とする。

(ハ) 民族軍の組織を認め、この軍隊の補充にはイスラム教徒人民を充てることを原則とする。この軍隊は今度の事変に参加した軍隊を国軍の編制に参照し新たに改編する。この軍隊の数及び駐屯地は別に討論し、附文二を作成し、調印後始めて効力を発生する。この軍隊の教練および命令はウイグル語、カザック語を用いることを原則とする。新疆駐屯の中央軍隊はこの民族軍と同一地に駐屯しない。相互の友好関係を保持し、相敵視しない。

(ニ) 双方の捕虜は事変解決後十日以内に釈放し、今後偏見を以て見ないことを保証する。

条文の第九には人民代表が推薦し、中央政府が任命する十五名の委員の地区別の選出方法についての補足規定が附され、イリ側の三区から六人、ウルムチ側の七区から九人、それぞれが副主席一名を含むことが規定された。この附文一は主文十一條と同時に調印されたが、第十條に附されたイリ側の民族軍の再編制問題についての協定である附文二はなかなか調印されなかった。イリ側は交渉中に、民族軍の増編、民国三十三年以後に新疆に駐留した軍

隊の撤退、警察と特務機関の取消し、ムハンマド・エミンの副主席就任の反対などを要求した。張治中はイリ側の要望をできるだけ受け入れ、妥協に妥協を重ね、六月五日になって漸く次のような附文二の調印にこぎつけた。

(一) イリ側の部隊は国軍の編制を参照し、騎兵三個団、歩兵三個団に編成し、総数は一万一千乃至二千を限度とする。この六個団のうち二個の騎兵团と一個の歩兵团を国軍とし、二個の歩兵团と一個の騎兵团を本省保安隊とする。

(二) 政府はイリ側に三区の部隊の指揮官を選ばせる。その指揮官は先の六個団の指揮をとるが、新疆省警備総司令及び全省保安司令の命令に従わなければならない。その指揮官は全省保安副司令を兼任する。

(三) 六個団の駐屯地は三区に限り、三区の治安は六個団が責任を負う。国境の守備は中央の辺防担任部隊が責任を負う。

(四) その指揮官が定つた後、政府はそれと協力して、アクス、カシュガル両区の保安隊を改編する。その補充はすべて当地のイスラム教徒人民から充てる。

(五) 三個の国軍団の待遇、供应、武装装備は国軍の規定を参照し、中央が補給する。三個の保安団については、本省保安隊の規定を参照し、省政府が保安司令部を通じ補給する。

(六) イリ側軍隊の改編はその指揮官の責任で行う。部隊改編以後の駐屯地は新疆省警備総司令及び省保安総司令の許可を得て定める。六個団の人数、馬匹、武器の実数は警備総司令及び全省保安司令に報告しなければならない。

以上のように協定は妥結したのであるが、張達鈞は中央政府側の代表張治中のイリ側に対する譲歩、妥協を強く非難している。これには後になって張治中が中共側に寝返ったことも原因していよう。確かに交渉に際して、イリ側の要求が大幅に受入れられ、中国領内の他の地域には見られなかったような高度の自治が獲得されたように見える。しかし、イリ側が当初に掲げた「東トルキスタン人民共和国」独立の旗が忽ち降ろされてしまったのはどういう訳であろうか。一旦は妥協して時を稼ぎ、再び独立の狼煙をあげる日を待機したのだろうか。それとも、結局は中国領内にとどまらなくてはやって行けない民族の運命を覚悟して、妥協に踏み切ったのであろうか。どちらとも断定できないが、私はイリ側にも内部分裂のきざしが見えたため妥協に踏み切ったのではないかと想像する。イリ側では後にはウイグル族とカザック族の対立が表面化し、カザック族の将ウスマン パートルはイリ側から離れ、国民政府側に着く。アリ ハン テュレ、ハキム ベク ホジャ等の当初の指導者達は姿を消し、アクメジャン カシモフ、ラヒムジャン、サイフウディン等の若い層が擡頭する。戦闘で最も功があったのはポリノフ、レスキンの白系ロシア人で、ポリノフは「東トルキスタン人民共和国」の副主席に任命されているが、後述する連合政府のメンバーからは外されている。イリ側の結束も決して強固でなく、民族間の軋轢、指導層の勢力争いが表面化して来たので、独立の旗を降ろし、和平に踏み切ったのではないだろうか。

### 連合政府の成立とその崩壊

一九四六年六月十八日、国民政府は新疆省政府の改組を令し、張治中を省政府委員兼主席に任命した。中央委員

は張治中のほか、民政庁長王曾善、秘書長劉孟純、財政庁長盧郁文、建設庁副庁長顧謙吉、ウルムチ市長屈武、専任委員管沢良の七名。地方委員は副主席ブルハン（タタール族）、副秘書長サリス（カザック族）、建設庁長ムハンマド エミン（ウイグル族）、教育庁副庁長蔡宗賢、財政庁副庁長馬廷驥（回族）、社会処長趙劍峯、社会処副処長エルデニ（蒙古族）、省政府委員アイサベク アレプトキン（ウイグル族）、鍾棟華（シボ族）、劉効黎の十名。イリ側の委員は副主席アクメジャン カシモフ（ウイグル族）、副秘書長アバソフ（ウイグル族）、教育庁長サイフウディン（ウイグル族）、民政庁副庁長ラヒムジャン（ウイグル族）、衛生処長達里力汗（カザック族）、委員阿不都克里木汗買合蘇木（ウイグル族）、アリ ハン テュレ（ウイグル族）、ウスマン（カザック族）の八名。当初の協定では中央委員が十名、地方委員が十五名で、そのうちイリ、タルバガタイ、アルタイの三区から六名、その他から九名となっていたが、中央委員が二名減り、地方委員がイリ側とウルムチ側で一名ずつ増えている。又、二十五名の委員を民族別に見ると、漢族十、ウイグル族七、カザック族三、タタール族、回族、蒙古族、シボ族、ウズベク族が各一で、キルギス族、タジック族および白系ロシア人は一名も選出されていない。イリ、アルタイ、タルバガタイの事変三区について見ると、全人口の五三パーセントを占めるカザック族が二名しか委員を出していないのに、人口の二三パーセントしか占めていないウイグル族が五名も委員を出している。これはイリ側の政治指導がウイグル族の手に握られていることを示す。カザック族が不満を持ち、その将ウスマン パートルがイリ側から国民政府側に寝返ったのも、こういった所に原因があるのではあるまいか。

七月一日、ウルムチで各委員の宣誓就職の式典が行われ、和平慶祝大会が挙行された。中央から于右任が派遣さ

れ式に臨席した。施政綱領が通過し、新疆省政府は中央政府の指導の下に、全省の和平を保障し、国家統一を擁護し、民主政治を實行し、民族團結を強め、貪汚、煙毒、賭博の追放が約束された。張治中は、和平に際してのソ連政府の斡旋の努力を謝し、施政綱領の中でも中ソの親善、経済合作、文化學術関係の發展をうたった。減税が約束され、多数の政治犯、軍事犯が釈放された。盛世才時代に逮捕投獄された共産黨員が延安に送り返されたのもこの時である。しかし社会情勢は依然として不安で、暴動、暗殺、デモが各地で頻発した。これらは張達鈞、張大軍によれば、張治中の軟弱政策のため各地に成立した「東トルキスタン青年党」の煽動によるものという（張達鈞前掲書 二二一頁・新疆近四十年変乱紀略 一〇四頁）。しかし、ラティモアは張治中の現実的な中道政策に反対する国民党内のC・C系の暗躍によるものと記し（邦訳書 一二四―二六頁）、見解が全く対立している。パーネット（前掲書 二五一頁）によると、一九四七年二月十九日、二十一日、二十二日の三日間、ウルムチでウイグル族の大規模な請願デモがあり、省税の半減、アクス、カシュガルの保安隊再編の促進、行政面における土着民の増員、中国軍隊及び警察の圧迫の中止、新疆駐屯中国軍の大幅な撤退、秘密警察の廃止、ジャリム、ハン、サリスの罷免、ウスマンの逮捕と処罰などを要求した。これに対して、二十四日にはカザック族とドンガン（回族）、二十五日には漢族の反対デモがあり、殊に二十五日には漢族とウイグル族のデモ隊が衝突し、双方に四人づつの死者を出したほどであった。ウイグル族と一部のカザック族の対立も表面化し、ウスマン、パートルはイリ側から離れた。その年の五月十九日、中央政府は新疆省主席にマースード、サブリを任命した。従来の漢人に代って現地人たるウイグル族を起用したのであるから、劃期的な人事と言えよう。しかしこれが決裂の決定的な原因となったのであるから皮肉である。アクメ

ジャン カシモフは張治中に対し、事前に協議されなかったのは遺憾であるとし、マスードの就任に強く反対した。ウイグル族の保守派の長老であるマスードは、国民党、殊にC・C系との政治的關係が深かったとラティモアは記している（邦訳書 一二九—一三〇頁）。五月二十八日、マスードは主席に就任したが、六月六日に反マスード大会が開かれ、各地にビラが撒かれ、マスードが事変当時新疆にいなかった事実、盛世才失脚の際にすぐ姿を現わさなかった事実、行政にも指導力にも実績がない事実が力説された。こうした緊張の高まりの最中に、北塔山事件が勃発した。これはこの年の五月から八月にかけて起った新疆と外蒙との国境紛争事件である。ラティモアは、イリ側から離れたウスマンを中国側が北に移動させたため外蒙軍との衝突を招いたと記しているが（邦訳書 一三三—一三五頁）、バーネットは、イリ側と気脈を通じた外蒙軍がウルムチを牽制するため仕掛けたと見ており（前掲書 二六六—六七頁）、張大軍も外蒙軍の国境侵犯としている。いずれにせよ、大事には至らなかったが、イリとウルムチの相剋は烈しさを加え、七月には托克遜、トルファン、鄯善などで暴動が起った。この鎮定に活躍したのが警備総司令宋希濂である。ミングロフによると、テロと弾圧を策動したC・C系の秘密警察の背後には駐ウルムチアメリカ副領事マッキーナンの手があったという（*Central Asian Review* II-2 p. 188）。イリ側の要人は和解に見切りをつけウルムチを去り始めた。六月十二日にアクメジャン カシモフ、八月二十四日にはラヒムジャンもイリへ引揚げ、ウルムチとイリの間は決裂状態となった。張治中は再三にわたりイリ側に呼びかけて和解への努力を示したが、無駄であった。張治中とイリ側のアクメジャン、ラヒムジャンの間で交換された文書についてはバーネットが詳しい。テキストはウルムチでは手に入るが、他の処では入らない、とバーネットは記している（前掲書 二五二—二五頁）。

張治中がアクメジャンおよびラヒムジャンへ送った第一回の書簡は一九四七年九月一日付である。張はその中で和平協定を尊重すると誓い、イリ側が協定を守らなかつたこと、特に軍隊再編の問題でそうだったこと、トルファン、トクスン等の暴動に責任あること、東トルキスタン運動を潜かに推進めていること、マスードの主席就任に理由なく反対していること、省参議会の開会をサボタージュしていることなどを非難し、交渉の再開を呼びかけた。

これに対し、イリ側は十月十六日の返信の中で、協定に違反しているのはウルムチ側であること、新疆駐留軍を四倍に増強していること、アクス、カシュガルの保安隊の再編に失敗したこと、民族軍を平等に扱うように努力しないこと、中国軍がイリ地方へ侵入する準備を続けていること、ウスマンのような盗賊を支持していること、軍隊と警察が不法な逮捕をしていること、新疆人民の反対にもかかわらずマスードを主席に任命したこと等を非難した。更に和平協定成立後はイリ側は新疆の中国からの分離を一度も表明したことがないと強調し、次の四つの要求が満たされるならば、交渉再開に応ずることを表明した。その四つの要求とは (一) 新疆における進歩分子に対する弾圧と拷問の即時停止、(二) すべてのイスラム教徒四人の釈放と、その責任者の処罰、(三) マスード サブリの主席罷免、(四) 一九四六年六月の和平協定の全面実施であった。

十二月九日、張はこれに対する返信を送り、イリ側の非難を一つづつ反駁した。和平協定以来、新疆駐屯の中国軍隊は半減したのに、イリ側の軍隊は倍増された。保安隊の再編が延び、イリ軍隊への武装の支給が遅れているのは、イリ側の指揮官達が軍隊の再編をしないことと、中国側の点検を許さないためである。中国側はウスマンに軍事的援助を与えていない。ウスマンはイリ側に虐待された。新疆の警察は再編され、「秘密警察」は存在しない。



囚人は法律に違反したものであって、その釈放は司法上の問題であつて行政の問題ではない。マースドは有能な主席である。張は以上のように主張したのち、「自由には一定の枠がある。如何なる国家も、その市民による祖国への叛乱を認めない。人民には自国へ反対する自由はない」と強調した。最後に、イリ側がもし、(一) 地区内の不正規状態を廃止し、(二) 中国の国旗を用い、トルコ語と同様に中国語を使用し、(三) 軍隊の移動と準備を止め、軍隊を自主的に減らして再編し、(四) 東トルキスタン運動と反中国宣伝を止め、(五) 他の地区との交通を復活するならば、交渉の再開に應ずると申し入れた。

翌一九四八年二月十七日のアクメジャンとラヒムジャンの返信は、張を「言葉だけで行為が伴わない」と非難し、約束が実行される保証はないと主張した。そして、もしマースドが止め、ウスマンが人民裁判で罰せられ、入獄中の進歩分子が釈放されるならば、交渉再開に應ずる用意がある旨を告げてきた。しかし、張が四七年十二月九日の書簡で示した条件については全くふれてこなかった。

従つて四月一日付の張の返信は短く、先に示した条件の実行が、今後の進展以前に必要とされるイリ側の誠意の最小限の象徴的証拠であると記した。これで両者の交渉は全く途絶え、決裂は決定的なものとなつた。<sup>(5)</sup>

### 「新盟」の活動

このようにウルムチとイリは決裂したが、両者は相戦うまでには至らなかつた。これは中国の内戦が共産軍に有利に展開されてきて、国民政府には軍隊を新疆に投入して問題の解決を武力で図るだけの余裕がなかつたためであ

ろう。イリ側にしても更に版図を拡張する意図も持たず、ウルムチを攻撃する口実も見つからなかったと思われる。決裂以後のイリ側の情勢は、前掲のミングロフ (Central Asian Review 11-2 p. 188)、サイフウディン (新華月報二一四 七六五―六八頁) の記載からうかがえる。

一九四八年八月一日、イリには「保衛新疆和平民主同盟」、所謂「新盟」が成立した。林炎の記述では「擁護新疆和平民主聯盟」となっており、サイフウディンが「保衛……」と記しているのと用語が違っているが、恐らくは原語がウイグル語で、翻訳の差であろう。この「新盟」は次の条項を確認した。

- 一、言論・報道・集会・宗教の自由
- 二、政府サービスの解放
- 三、民族語による教育
- 四、貧困者に対する無償教育
- 五、司法と行政の分離
- 六、法廷における民族語の使用
- 七、奉仕人、女性に市民権を賦与
- 八、医療救助、映画、ラジオなどの公共的利益
- 九、動産、不動産の個人所有の制限
- 十、農業、牧畜の改良

「新盟」への加入者は一九四九年五月に五万人、同年九月には七万七千人に達し、二十七の支部と七百五十五の地区支部ができた。ミングロフは一九五〇年六月二十一日の新聞「ヤンギ ユル」を引用し、「新盟」の構成を次のように記している。

職業別統計

労働者	一六・七一〇
農民	二八・六八三
牧畜業者	一〇・八六六
技術者及び職人	三・三〇一
事務職員	五・六一七
商人	一・九〇九
学生	五・二一四
家事労働者（婦人を含む）	七・七八六
民族別統計	
ウイグル族	四四・二三四
カザック族	二〇・二三四
モンゴル族	四・七六八
伊寧事変と新疆の民族運動	中田

ドンガン族(回族)	一・四〇〇
ロシア人	一・六四三
キルギス族	一・〇二五
タタール族	九八七
ウズベク族	八四三
ソロン族	八一二
漢族	八六九
シボ族	五八七
タジク族	五
トルコ人	五
その他	三

以上の統計から「新盟」は依然としてウイグル族中心のことが推察される。イリ、タルバガタイ、アルタイの三地区では、カザック族が全人口の五三パーセントであり、二三パーセントのウイグル族の二倍以上を占めながら、「新盟」への参加者がウイグル族の半数に満たない。「東トルキスタン人民共和国」以来、この地方の政治の指導権はウイグル族の手に握られていたことを示す。

また、土地のない農民には土地が分配され、現金や種子の貸付は進み、税金は五〇パーセント削減されたという。

耕作地は一九四一年の二十五万一千ヘクタールから三十七万五千ヘクタールに増加し、収穫は二十一万二千トンから二十九万五千トンに増したと記している。

ここで考えなくてはならないのは、「東トルキスタン人民共和国」とこの「新盟」の性格の差である。既に記したように、イリとウルムチが決裂してから、張治中とアクメジャン カシモフの間に書簡による意見の交換がなされた。林炎によると、その間の一九四八年八月、「新盟」の新疆に対する態度として正面から表示されたのは次の四項目であった（大公報 上海版 一九四九年一月八日）。

- 一、東トルキスタン共和国の称号を放棄する。
- 二、漢族反対の狹隘な民族主義を放棄する。
- 三、張治中を擁護し、マースード サブリに反対する。
- 四、中国を擁護するが、中国の集権政治に反対する。

この項目の中から、「新盟」が中国から分離して東トルキスタンを独立させることを目標にしているのではなく、中国内に止まって、その中での高度の自治を要求していることが明かにされる。四七年十月十六日の張治中宛の返信のなかでも、和平協定成立後はイリ側は新疆の中国からの分離を一度も表明したことはない、と強調している。「保衛新疆和平民主同盟」と称して、「新疆」という文字を用い、「東トルキスタン」の文字を捨てたのも、中国領内に止まるという意志の現れと見てよいのではなからうか。もともと、張治中が「イリ側は東トルキスタン運動を密かに推進している」と非難しているごとく、「新盟」のメンバーのなかには、恐らくは「中国からの分離主義

者」「東トルキスタン獨立主義者」も相当数いたと思う。しかし少くとも新盟のテーゼからこの主張が消え去ったことは注意すべきであろう。

また漢人反対の狭隘な民族主義の放棄についても、先に引用したアクメジャン カシモフの遺稿からも窺うことができるし、林炎もこの点を認め

もし再び革命が起つても、彼等は万里投荒の漢人に対して、無秩序で野蛮な屠殺方式を放棄し、秩序ある文雅な形式を採用するであろう

と記している。

### ブルハンの登場と中共による統一

一九四八年（民国三十七年）十二月三十一日、国民政府はタタール族のブルハン（鮑爾汗・一八九五―）を新疆省政府委員兼主席に任命した。当時国民政府は中共軍との戦に敗北を重ね、華北の大部分を失っていたから、親ソ、親ソのブルハンの起用も止むを得なかったであろう。張大軍、張達鈞の記述によれば、これより先、張治中は蘭州で秘策をねり、ブルハンを国府委員に任命して南京に派遣し、ソ連大使羅申と秘かに接触させ、十二月初旬に所謂「張羅密約」を結ばせた。その結果、ブルハンの主席任命、マースード サブリ、宋希濂の罷免が取極められたという（張達鈞 前掲書 二二九―三〇頁・新疆近四十年変乱紀略 一一四―一五頁）。

一九四九年一月十日、ブルハンは省主席に就職し、十一日に民衆に告ぐるの書を發表して、親ソ政策を強調、イ

り側との交渉再開を表明した。この年に入ると、中原における国共内戦の大勢は既に決し、蒋介石は下野し、国民政府は広州へ落ちのびた。勝誇った中共軍は七月には西北地区に向って進撃を開始した。馬步芳、馬鴻逵の甘粛回民軍は平涼、固原で敗れ、八月二十五日には蘭州が陥落、破竹の中共軍は甘粛河西の廻廊地帯を西進して新疆に迫った。九月二十六日、新疆省主席ブルハンと新疆警備総司令陶峙岳は連名で北京に通電、新疆は今後広州の国民政府との関係を絶ち、北京政府の命令を接受する旨を表明した。ワイティングによると、中共軍が甘粛を西進している頃、ウルムチ駐在のソ連総領事は陶峙岳と接触し、陶に外蒙の例に倣って新疆の独立を宣言することを申し入れた。共産軍の勝利の後、新疆は連邦共和国の一つに編入されるであろう。「もしそうするならば、我々は中共軍に命令して新疆への進撃を中止させるであろう。」しかし陶はこれを拒み、中共軍への降服の道を選んだという(前掲書 一一七—一八頁)。

また、これより先、「新盟」即ちイリ側も北京政府への参加を決定し、アクメジャン カシモフ、ラヒムジャン等有力な指導者九名が九月中旬北京で開かれる政治協商会議に参加すべく空路飛び立った。しかし不幸にも飛行機事故のため九名全員死亡し、僅かに先行したサイフウディンのみが会議に参加できた。アクメジャン等の死について、張大軍は「狡免死して走狗煮らる」と記し(新疆研究 三三三頁)、共産党の陰謀のごとく臭わせている。モズレーもこの事故死には疑問を抱いている。彼によると、アクメジャンは古い流派の民族主義者であり、これに反しサイフウディンはかつてのソ連共産党員であり、三地区にスターリン主義を忠実に実行したという(前掲書 一三三頁)。またイリ側の北京政府への参加は、論議の結果、サイフウディンの意見で決つたらしい。一九五一年に中共によつ

て追放された連中は、恐らくこの時にサイフウディンの新路線に黙従しなかつた連中であつたらう、とモズレーは記している（前掲書 一四頁）。イリ側にも北京政府への参加を喜ばず、独立乃至はソ連への依存を主張した一派もいたであらう。伊寧事変初期の反漢的色彩から見て、これは十分有り得る。モズレーは

三地区のソ連系の指導者達は自主的に中国共産党を支持するようにロシア人に説得されたであらう。中共軍に抵抗しなかつたのは、中国の良き行動をロシア人が保証してくれると信じたためであらう（前掲書 二二二頁）と記し、ソ連寄りの連中もソ連に説得されて中共政権への参加を決めたと解している。

十月一日、陶峙岳は酒泉に赴いて王震麾下の中共軍を迎えた。十二日、中共軍の先鋒隊は星星峽に入り、二十一日には王震も入新した。十二月二日には彭德懷が空路新疆に入り、軍区司令員王震、副司令員陶峙岳、政府主席ブルハン、第一副主席サイフウディン、第二副主席高錦純という中共軍、ウルムチ側、イリ側の三者連合の新体制で北京政府の傘下に入った。

ただカザック族のウスマン、バートルとハミのヨルバス、ハーンの二人は新疆の東部地区に立てこもり、ゲリラ戦を展開、中共軍に抵抗した。しかしこれも後援続かず、ウスマンは捕えられて殺され、ヨルバス、ハーンも西藏を経てインドへ脱出した。

このようにウルムチ、イリの二つの政権に分裂していた新疆も漸く中共の手によって統一された。ダーリンは近い将来中国に共産主義政府が成立するようなことがあれば、この政府は、中央アジアのトルコ人は中国ではなくてソヴェエトの支配に属することを承認せねばならぬだらう（邦訳書下巻 二四五頁）



と、新疆の中国からの分離、ソ連への併合を予測したが、この予想は見事外れた形である。結果的には、ソ連がさっぱりと新疆を中共に返した形となったが、ソ連が新疆に対して野心を持っていなかったとは言いが切れない。モズレーは、もし内戦に際して国民党が勝利を占めたなら、ソ連は三地区をただちに併合し、新疆全体が外蒙のような形になって、中国の支配には戻らなかつただろうと記している（前掲書 一四頁）。また国民党の方にもこういう動きはあつたようで、リーパーマンやサリバンの報道では、国民党は、中共に勝つて中原地区を保持するために、ソ連に新疆を譲渡する計画を持っていたといふ。<sup>(6)</sup>

### 新疆の諸民族と民族運動

新疆現任の諸民族をどう分類するかは、幾多の議論のあるところである。ラティモアはこれらの分類法を次の四つの傾向に整理した（邦訳書 一四四―一六三頁）。

第一の傾向は蔣介石の唱える「中華民族説」で、「大漢族主義」として非難されるものである。即ち、中国の政治的境界内にあるすべての民族は単一の「中華民族」に属するもので、新疆在住の諸民族も、モンゴリアやチベットにいる諸民族と同じく、中華民族内の「宗族」に過ぎない。諸宗族の差異は、習慣、風俗、宗教的信仰、地理的環境に限られており、人種や血に及ぶものではない。中国における幾多の宗族は単に一民族であるばかりでなく、一人種を構成している。これが「中華民族説」で、漢族以外の諸民族を「中華民族」の名で漢族内に吸収しようとする傾向があるため、「大漢族主義」として非難されている。この説は国民党の右派グループ、特にC・C系の理

論家によって進められてきた。

第二の傾向は「文化自治主義」と名づけられるもので、盛世才は新疆の諸民族を次の十四に分類した。

- (一) 漢民族
- (二) 滿洲族
- (三) モンゴル族
- (四) イスラム教徒（漢回）
- (五) ウィグル族
- (六) カザック族
- (七) タジック族
- (八) タランチ族
- (九) タタール族
- (十) キルギス族
- (十一) ウズベク族
- (十二) シボ族
- (十三) ソロン族
- (十四) ロシア人

これは強制的同化の意図を却けて、その代りに文化の多様さという綱領を強調するもので、盛世才が一九三四年に六大政策を発表した際に、ソ連の少数民族政策を模倣して、新疆の諸民族を分類したものである。

第三の傾向は新疆における住民の大部分がトルコ系諸言語を話し、かつイスラム教に属しているという事実を強調するもので、「汎トルコ民族主義」と呼ばれるものである。これはマストド サブリヤムハンマド エミン等の主張するもので、新疆の諸民族は、漢族（漢回を含む）、満洲族（シボ、ソロンを含む）、モンゴル族、ロシア人を除く全体の十分の九は、すべて単一のトルコ民族に属するものであるという。即ち、盛世才のいう十四の諸民族のうち、ウイグル、カザック、タジック、タランチ、タタール、キルギス、ウズベクの七つは単一の「トルコ民族」に属すると主張する。この説の最大の欠点は、イラン系の言語を話すタジック族もトルコ民族の枠内に入れていることである。

第四の傾向は地域的自治と文化的自治の思想を組合せたものであり、従つて単に「連合主義」と呼ばれるべきものである。それはその着想をソ連の民族政策から得たもので、中国共産党によつて活潑に宣伝されているが、非共産党、非中国人少数民族の相当な共鳴を得ている。

ラティモアは以上の四つの傾向に分けているが、第四の「連合主義」という中国共産党の主張については、具体的な分類法にふれていない。恐らくラティモアが「中国の焦点」を書いた当時は、明確にされていなかったからである。ラティモアは、イスラム教徒と非イスラム教徒の中国人、即ち回族（ドンガン）と漢族を一民族に結びつけるかどうかの問題に苦しみながらも、共通の言語という点を重く見て、これを一民族として取扱っている。更に

進んで、

(新疆の)人口全体が十民族に区分さるべきであるといっても、さほど問題はないと考えられると結論し、次の十民族に分つ。

- (一) ウィグル族
- (二) カザック族
- (三) キルギス族
- (四) モンゴル族
- (五) イラン人(タジック族)
- (六) 中国人(漢民族)
- (七) ロシア人
- (八) 満洲族
- (九) ウズベク族
- (十) タタール族

そして(一)から(五)までを地域的基礎のある民族、(六)以下を地域的基礎のない民族としている。即ち盛世才が分類した十四の民族のうち、(四)のイスラム教徒(漢回)を(一)の漢民族に、(五)のシボ族と(七)のソロン族を(二)の満洲族に、(八)のタランチ族を(三)のウィグル族に、それぞれ結びつけて、十四を十に整理したのである。

しかし、中国共産党の民族分類は、結果的にはラティモアの分類法と違っている。むしろラティモアが「地理的基準にも、経済的基準にも、宗教的基準にも、行政区劃にも基いていない」といつて誇った第二の傾向、即ち盛世才の分類法に近い。中国共産党は、ドンガン即ち中国語を話すイスラム教徒を回族と呼んで、非イスラム教徒である漢族とは別個の民族として取扱っている。ソロン族もダフル族として、シボ族とともに、満洲族とは區別している。ただタランチ族はウィグル族と同一民族に取扱っているようである。即ち新疆の民族を十三に分けているのである（新華月報 一一一—三六二頁）。タランチの歴史は、十八世紀半ば乾隆帝が準部回部を平定した際、空虚になった天山北路の地に、天山南路に住んでいた纏回即ちウィグル族を強制的に入植させ、これをタランチ即ち耕作者と呼んだのに始まる。民族的にも、文化的にも、宗教の上でも、差がないのであるから、タランチをウィグル族のなかに入れるのは当然と言えよう。従ってラティモアの言う第四の傾向「連合主義」も第二の傾向「文化自治主義」とは大差なく、結局は新疆の民族の分類法としては次の三つがあるといふことができる。

第一は、単一の中華民族から成り、そのなかはいくつかの「宗族」に分れているが、血液や人種の差はないといふ国民党の中華民族説。

第二は、漢民族、満洲族、蒙古族、回族、ウィグル族、カザック族、タジック族、タタール族、キルギス族、ウズベク族、シボ族、ダフル族、ロシア人の十三の民族に分ける中国共産党の主張。

第三は、漢、満、蒙、ロシアなどの外来移住者を除き、その他はすべて単一のトルコ民族であるというマースードサブリ、ムハンマド エミン等の主張。

第一の中華民族説は、国民党が蒙、藏、回部などの非漢人地域を支配するために考え出した理論で、新疆の諸民族から生れたものではない。またこの理論は新疆の民族運動を抑えつけるものでもある。漢、滿、シボなどの諸民族には歓迎されるかも知れないが、ウイグルやカザックなどトルコ系諸民族はこれに承服できないし、彼等から「大漢族主義」と呼ばれて非難されるものである。しかし、第二と第三は、新疆の土着民族の間に生れ、またそうでなくとも、土着民族の間に大きな支持がある主張である。従って新疆の民族運動を考察する場合には、この第二と第三の主張を基礎におく必要がある。即ち新疆の土着民族は、ウイグル、カザック、タジック、タタール、キルギス、ウズベクの諸民族に分けて考えるべきか、或は単一の「トルコ民族」として把握すべきか、という二つの理論である。後者に対しては「大トルコ主義」という批判もあるし、イラン系のタジックを含めるのはおかしいという主張もある。またこの理論は、マスード、サブリヤムハンマド、エミンなど、ウイグル族右派の意見で、他の少数トルコ系民族をウイグルに吸収しようというウイグル中心の理論ではないか、という疑念も持たれる。しかし一方、前者に対しても、これは共産党の民族分裂政策である、トルコ民族に対するソ連、中共の分割統治のために創出された理論である、と主張する人もいることを忘れてはならない。ラティモアは前者の理論に与しているようであるが、彼の著書「アジアの焦点」の書評のなかで、これに反駁を加え、後者の支持を表明している人も少くない。The Muslim World の四一巻二号に見えるウイングゲート (R. O. Wingate) の書評「Royal Central Asian Journal 三八巻一号に見える無署名の書評は、いずれもこの立場である。

張達鈞は新疆の民族運動を「突厥主義」と「東トルキスタン主義」の二つに分けている。「突厥主義」はマスー

ド サブリヤムハンマド エミンの主張するもので、新疆を突厥人(トルコ民族)の新疆とする運動であるが、中国からの脱離を希望するものではない。高度の自治の要求にとどまるものである。これに対し「東トルキスタン主義」はアクメジャン カシモフやサイフウディンの主張するもので、東トルキスタン即ち新疆を独立させ、ソ連邦の一環としようとするものである。張達鈞はこう規定しているが(前掲書 二二五—一六頁・二八六頁・二九〇頁)、

事實はこんな単純なものではない。張達鈞が「突厥主義」の代表として引用したのは、アイサベク アレプトキン(艾沙伯克)が一九四六年の「阿爾泰月刊」に掲載した「文明与政治自由」という論文で、これには「我我は中国からの脱離を願ってはいない、我我の主義は三民主義であり、我我の国家は中国である」と記されているという。しかし、張達鈞が同じく「突厥主義者」としてあげたムハンマド エミンの考えは少くとも現在はこれと同じではない。トルコに亡命しているエミンの現在の主張は、新疆の中国内での「高度の自治」ではなく、新疆の「独立」である。これは国防研究院の「辺疆論文集」第一冊(民国五十三年刊)に掲載されている朱家驊の「論所謂新疆問題」「再論所謂新疆問題」から窺うことができる。この二つの論文は、トルコに居るムハンマド エミンが朱家驊に寄せた書簡に対する朱氏の公開返信で、エミンが新疆の独立を主張しているのに対し、朱氏が新疆は歴史的にも中国の一部であると反論したものである。ムハンマド エミンがトルコで新疆の独立を主張していることは、ここから知ることができる。ラティモアは

事實においてエミンは「自決」の権利さえも要求していない。……エミンも他のトルコ民族主義者も、「自治」の権利以上のものを全く求めていない(邦訳書 一五二頁)

と記しているが、エミンの現在の立場は大きく変化している。これはあるいはトルコにずっと以前から亡命しつづけている西トルキスタンの民族主義者達の影響を強く受けたのかも知れない。アイサベク アレプトキンも現在トルコに亡命中とのことであるが、彼も恐らくはムハンマド エミンと同じような主張に変化したのではあるまいか。

張達鈞はアクメジャン カシモフ、サイフウディン等を「東トルキスタン主義」と呼び、彼等は新疆を中国から独立させ、ソ連邦の一環としようとしている、と記しているが、これも疑問である。既述のごとく、伊寧事変勃発直後彼等が意図したのは「東トルキスタン人民共和国」の独立であった。しかし間もなく、「中国を脱離する意志はない」と表明してウルムチとの和平に踏み切り、和平決裂後も「保衛新疆和平民主同盟」を作り、東トルキスタン共和国の称号を放棄している。そして異論はあつたかも知れないが、北京政府への参加に踏み切っている。張達鈞のように簡単に割切るわけにはいかないようである。

連合政府秘書長劉孟純がバーネットに語ったところでは、ウィグルの民族主義者は次の三つのグループに分けられるという(前掲書 二七二―二七三頁)。第一は独立を目指すもの。第二は中国の主権の下に高度の自治を獲得しようとするもの。第三は親中国か親ソ連か、いずれかを選ばねばならないと感じているもの。以上の三つである。大部分のウィグル族は第三のグループに属し、そのうちの親中国派がウルムチに、親ソ連派がイリに居るといふ。この劉孟純の分類では、第二のグループと、第三グループのうちの親中国派の区別が明瞭でない。結局、新疆の民族運動は次の三つに分けられるのではないかと思う。



A、完全な独立を目指すグループ

B、中国の主権を認め、その下に高度の自治を要求しようとするグループ。

C、ソ連に頼り、その庇護の下に独立乃至は自治を獲得しようとするグループ。

彼等にとつての理想像は「完全な独立」であろうが、これが現実的には甚だ困難であることはいうまでもない。

真の独立はたとえ獲得できても、それが維持できると考えている責任ある人はいない

と言つたマスード サブリの言（バーネット前掲書 二七二頁）は中ソ両大国に分割されて、独立の希望を失つた中央アジアトルコ系民族の悲哀を端的に示していると言えよう。ムハンマド エミンのように亡命先のトルコで独立を叫ぶAグループがいないわけではないが、大部分の人はBかCの道を歩まねばならないことに気付いているであらう。またこういう民族運動の基盤となる「民族」の概念にも

X 新疆の土着民族を、ウイグル、カザック、キルギス、タジック、タタール、ウズベクの諸民族に分ける考  
え方

Y これらはすべて単一の「トルコ民族」に属するという考え方

の二つが対立していることは既に記した通りである。このA・B・Cと、X・Yが互に組合わさることによつて、新疆の民族運動はいろいろな形に発展する。張達鈞の記述では、「突厥主義」はB—Y、「東トルキスタン主義」はC—Xの組合わせということになる。しかし張達鈞が「突厥主義者」としてあげたムハンマド エミンの現在の主張はA—Yといった方が正しく、「東トルキスタン主義者」としてあげられたサイフウディンのその後の立場はB—X

ということができよう。もとより、新疆から台湾に亡命したものは恐らく、B—Y、乃至はB—Xの主張を続けているであろうし、中共政權成立後、「地方民族主義者」として弾劾されたものはA—Yの立場を固執したのである。また一九五一年頃「反革命主義者」として追放されたイリグループはC—Xであろう。事実、伊寧事変勃発当時のイリ側はC—Xの色彩が強かった。「東トルキスタン人民共和国」の綱領を見ると、漢人の虐政の根除、国体は民主政体、各族一律平等、親ソ政策、ウィグル文を国文、とあってC—Xの立場をとっていることが明確に示されている。それが和平交渉を申し入れる時に、「自分達はもとから中国を脱離する意志がない」と態度を豹変して、独立を取消した。和平決裂後も、「新盟」を組織したが、「東トルキスタン」の代りに「新疆」の文字を用い、中国から脱離する意志がないことを示した。更に中共政權が成立すると、直ちに参加に踏み切った。このようにC—XからB—Xにどうして変わったのだろうか。第一に考えられるのはソ連のイリ側に対する説得である。既述の如く、一九四五年九月、イリ側が和平交渉の斡旋をソ連に依頼した時に、張大軍はこれをクレムリンの差金と断じた。差金とまでは行かなくても、説得工作があったことは想像される。当時は中ソの関係も友好的であったし、国共も合作中であつた。イリは新疆の一部であり、新疆は十八世紀以来中国の領土であつたから、イリ地方にソ連の衛星国を作るとは国際間の不信を招き、帝国主義の汚名を着せられることになりかねなかつた。これをソ連は恐れ、イリ側を説得したのではあるまいか。まして一九四九年に中共政權が成立した時には、今日のような深刻な中ソの対立は夢にも考えられなかつた。同じマルクス・レーニン主義を奉ずる党が政權を取つたのであるから、これを裏切るなどと思ひもよらなかつたであらう。モズレーの言うごとく、「三地区のソ連系の指導者達は自主的に中国共産

党を支持するようにロシア人に説得されたであろう。」第二はイリ側の内部事情である。ウイグルとカザックの対立が深刻化し、指導者層がウルムチ政権に対抗する自信を失いはじめたので、和平に踏み切ったのではあるまいか。またカザック族は帝政時代からロシア人には散散いじめられており、ソ連のホルホーズ政策を嫌って新疆に亡命したカザック族の数は大変なものであった。ソ連領のカザック共和国の人口が急減したのもこのためである。また政治的に優位を占めたウイグル族も、三地区だけではカザック族に数的に劣勢で、天山南路の各地区と分れたままでソ連圏に入れば、忽ち少数者に転落してしまう可能性があった。まして、カザック族やキルギス族と違って、ソ連領内には兄弟民族が少く、加盟共和国もなかった。ウイグル族の指導者は三区だけで中国を脱離するのは得策でないと感じたのではあるまいか。第三は中共の工作である。中共のイリ側に対する工作が成功し、サイフウディンの抱きこみに成功したのではあるまいか。モズレーも記したごとく、一九五一年以降、中共の意に沿わないソ連系の連中は追放される。一九四九年九月の事故死といわれるアクメジャン カシモフやラヒムジャンの最期も、あるいは中共の手によるものではないかという疑念も生ずる。いずれにせよ、中共政権成立後、新疆は急速に中央化され、多数の漢民族が進出する。そして相当数のウイグル族やカザック族がソ連領内に亡命する。これら亡命者は恐らくC—Xの立場を固執した連中であろう。

註

(一) この馱馬に対する反対運動が事変勃発の導火線となつたことはトトフの記述にも見える。即ち Central Asian Review 八巻四号四四二頁に「一九四四年三月、政府は

伊寧事変と新疆の民族運動 中田

一万頭の馬を国民党軍に献納すべしという命令を出した。この政令の結果として、八月にイリ地方ニルク地区の農民、牧夫が叛乱に立上った」とある。モズレーも「叛乱は一九四四年のアルタイ カザック

(国立国会図書館参考書誌部アジア・アフリカ課長)

の国民党の献馬令に対する反対に端を發し、十一月にイリのウイグル族に波及した」(前掲書 一二頁)と記している。

(2) 単に「東トルキスタン共和国」と記され、「人民」の文字を欠いている資料もあるが、張大軍、張達鈞の記述に従って、ここでは「人民」の文字を入れておく。英文の図書では East Turkestan Republic と、People's を欠いている記述が多い。ただ注意すべきことは、一九三三年九月、馬仲英の新疆侵入当時、カシメガルにおいて独立宣言をしたサビド、ダムラー政権がこれと同じ「東トルキスタン共和国」の名を用いたことである。この共和国は僅か数ヶ月存続しただけで、三四年一月、馬仲英麾下の回民軍によって潰滅された。

(3) 後に述べるように、このアクメジャン カシモフは一九四九年九月、北京の政治協商會議に参加する途中、飛行機事故で死ぬ。彼がこの事変の最有力の指導者であり、また親ソ派と見られているだけに、彼の死には疑問を抱くものが少くない。事故死ではなく、中共の陰謀ではないか、という疑いである。従つて彼の遺稿も本当に彼の手になったものかどうか、疑える節も存在することを附記する。

(4) パーネットによると、イリ側は駐ウルムチソ連総領事

に申入れたという(前掲書 二四八頁)。恐らくイリ側は駐伊寧ソ連領事に調停を依頼し、それが駐ウルムチ総領事を經て、駐華ソ連大使に取次がれたものであろう。

(5) パーネットによると、ウルムチ・イリ間の書簡による交渉はこれで終つていようだが、林炎によると、一九四八年八月、「新盟」即ちイリ側の新疆に対する態度が表示されており、交渉が続いていたとも解される(大公報 上海版 一九四九年一月八日)。

(6) モズレー前掲書 一四頁。モズレーはこのリーパーマン、サリパンの報告をニューヨークタイムスの一九四九年二月一日、三月三十日の記事から引用している。